本多日生猊下施本用著書一覽

◎法華經自我偈講義　金貳拾錢
拾部特價　金壹圓（送料共）

◎法華經要文　並製金參拾錢　上製金五拾錢

◎教育勅語と思想問題　金貳拾錢
拾部特價　金壹圓（送料共）

◎佛教の大要　金五錢
參拾部特價　金壹圓（送料共）

◎うゐの奥山今日こえて　金貳拾錢
拾部特價　金壹圓廿錢（送料共）

佐藤海軍中將著

◎此の際に於る吾人の覺悟　金拾貳錢
拾貳部特價　金壹圓（送料共）

以上各送料一部金貳錢

右講讀希望者は左記へ申込んで下さい

名古屋市東區田代町城山
統一編輯局
國電話東五四八七番
振替口座名古屋一〇八一九番

統一定價		
一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共
	前金之事	

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓
	前金之事

▽本號に限り一部金參拾錢送料金五厘△
（但し月極め讀者は例月號の價格にてよろし）

大正十三年九月十七日印刷納本
大正十三年十月一日發行　第三百五十五號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄

名古屋市東區千種町字五反田五二番地
印刷所　三益社

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所

名古屋市東區田代町字城山七十七番地
振替東京五一〇七一番
編輯所　統一編輯局
電話東五四八七番
振替名古屋一〇八一九番

不許複製

明治三十年二月十一日第三種郵便物認可
大正十三年十月一日發行（毎月一回發行）第三百五十五號

目次

國家の興隆と佛法の興隆……本多日生
日蓮主義より見たる無量義經……井村日咸
鳥物語……笹川篁堂
法華經要文講義……本多日生
罷睡錄……黃薇庵主人
記事報導……

第廿八年拾壹月號

大僧正本多日生師著

うゐの奥山今日こえて

一部定價金貳拾錢　郵稅金貳錢
施本用特價拾部金壹圓貳拾錢（送料共）

いろは四十八文字、そこに如何の宗教を識し、そこに如何の哲學を含める、如來一代五十年の說化八萬四千の法門は、簡約せられて四十八文字に有り、東洋六千年の文化は醇醸せられていろは歌に存す。

本書は宗教界の權威本多日生師によつて、眞の人間觀、眞の生死觀、眞の解脫、眞の信仰、眞の道德を講說せられたるもの、釋尊の教に依つて光あり力ある人生の行路を進まんとする者は、必ず精讀せよ。

顯本法華宗管長本多日生猊下序
統合宗學林高等部長井村日成著

日蓮聖人の宗旨

正價　布裝金參圓
紙製金貳圓
郵便書留小包　拾八錢

海軍中將佐藤鐵太郎氏著

此の際に於る吾人の覺悟

壹部　金拾貳錢送料金貳錢
拾貳部特價金壹圓（送料共）

名古屋市東區田代町城山

發行所　統一編輯局

電話東五四八七番
振替名古屋一〇八一九番

國家の興隆と佛法の興隆

本多日生

我國の現狀に就て重大な問題がいろ〳〵複雜して居りますけれども、之を根本に戻しますと日本の國家の盛衰興亡といふことが一番大きな問題のやうに考へるのであります。そうして國家の興廢存亡にはいろ〳〵の事情が關係を有つ譯であるけれども、その根本に遡つて考へますれば無論國民精神が第一であります。その國民精神の指導陶冶を全うするには、東洋の精神文化の問題、我國の歷史的に發達したる所の精神文化に遡つて行くと考へるのであります。それ故に國家の興隆と佛法の興隆といふことを併せて研究するが、今日の場合に於ての最も重大なる問題であると思ふのであります。

簡單に申せば聖德太子のやうな方が我國にお出まし下さるか、桓武天皇或は聖武天皇のやうなお方がお出まし下さつて、今日の教育勅語の趣旨を尙ほ一層廣い意味に見て、さうして佛法の興隆を學校に於ても考へるやうに、文教の方針をそこに進めて戴きたいと希望するのであります。大正の今日に日蓮聖人が出現せられたならば、必ずや我國文教の方針に向つて鬪ひを開かれることゝ考へる。この文教の方針がいま一層明瞭にならなくては、どうしても國民の精神が本當に鍛へ上げられない、隨つて國家の興隆を順序よく進めて行くことが疑はしくなりはしないかと思ふのであります。斯る意味に於て吾々日蓮教徒は日蓮聖人の憂國の赤誠に鑑み、又その透明なる示教に基いて、この問題に向つて聊か意見を開陳して見たいと考

へるのである。

先づ國家興隆の基礎がどこにあるかといふことに就ては、これは多く論じないでも昨年の詔書は明瞭に「國家興隆の本は國民精神に在り」とお示しになつて居る。詔書には「國民精神の剛健に在り」と仰せられたけれども、それは今日の時弊に對して特に剛健に重きを置かれたのであつて、廣く云へば國民精神が頽廢をするとか、國民精神が充實するとかいふ意味に於て、國家の興廢は別れるのである。今日は餘りに軟弱な弊になつて居るから、特に剛健をお示しになつたが、單に剛健の一つのみが國家を興隆せしむるものではないと存じます。即ち理想的な、申分の無い立派な國民精神を陶冶しなければならぬことであらうと思ふ。強いばかりで優しみがなくても決していく譯ではない、優しくても腰が拔けてはいかんのであるから、それはモウ別段論ずる迄もないことであるが、時弊に向つて國民精神の剛健といふことを仰せられたのである。私が考へる所では、餘りに日本人が外來の文明に屈從して獨立の氣象が無い、所謂腰拔けといふやうな傾きがあるからして、そこで剛健といふことを仰せられたのだと思ふ、自屈の精神が非常に燈んになつて來たからして「剛健」をお擧げになつたけれども、廣い意味に於て申せば、國家の興廢は國民精神の如何にあるといふことは、永久變らない所の普遍的永續的な命題として、何人も反對の出來ないことである。剛健であるとか穩和であるとか、或は慈愛であるとか、さういふやうなことはこれは匙加減に依つて、時弊に對して多少の按排があるけれども、國民精神そのものを立派にしなければならないといふことは永久の眞理で、決して變化はないことである。

その國民精神を理想的に永久に磨いて行く所のものは何かといへば、所謂精神文化であつて、精神文化

の内容を爲す主なるものは道德、宗教、哲學である、之を人間の智情意に分けて見れば、理智に屬する所の哲學、情操に屬する宗教、意志に屬する道德である。併しこの三つも強て哲學とか道德とか宗教といふ名をつけるのである、人間の心の智情意といふも強て分類する丈のものであつて、本當の纏つた精神は智情意の結晶したものでなければならぬ。智が情と離れたり、意志が情と離れたり、情が智慧と離れたりしたものは値打のないといふ事は、心理學上に於ても定論のある事で、學問上の便宜からさういふ名前をつけて心象の見分けをするだけのものである。本當に出來上つた立派な精神といふものは、智情意のあらゆる方面が共同動作に出て所謂歩兵も騎兵も工兵も協力して進んで居るが如きものでなければならない。

隨つて哲學、宗教、道德といふも、それが切れ〳〵になつて、道德としては認められるけれども、宗教の方には何にも考へて居らぬといふやうな、さういふ道德は價値あるものでない。哲學もやはりその通りで理窟ばかり言ふけれども宗教のやうな温味に接觸を執らぬやうな、唯だゴツ〳〵いふやうな哲學は中途半端のもので出來上つたものではない。宗教もやはりその通りである、「有難いッ」といふ方は大變に立派だけれども、眞理の研究に入れば直ぐに打壞されてしまふ、さうして道德上から觀察しては何の力も現して來ない、唯だ「有難い〳〵」と言つて居る、さういふやうなものは論ずるに足らぬ詰らぬものである。この一般の國民を永久に教化指導して行くには、之を心に於て言へば智情意の三方面の何れもが協力して立派に發達することを希望するのであり、優しくしさへすれば馬鹿でも宜いといふ理由は、永久に用ひらるゝべきものではない、賢くさへあれば無慈悲でも宜いといふやうな人間は、一人も居ない方がよいのである。何處までも智情意の三方面の協力したるものが、今日よりはヨリ高く進んで來なければならぬ。そ

れを比較して、智慧よりは慈悲の方が宜しいとか、慈悲より元氣の方が宜しいとかいふやうなことは、その時々に於て言ふのである。一方に親切はあるけれども元氣が拔けて居る人間に對しては、所謂「爲人生善」と言つて、その人だけに就ての缺點をいふ場合に、この者は意志は强いけれども親切が足らんから「人間は親切がなくてはならぬ」と言うてその人を啓發するだけのもので、一般國民に對しては親切でなければいけないといふやうな事だけ言つた所が、意義をなさないものである。人間は玲瓏玉の如く、あらゆる方面がちやんと整うて行かなければならぬ。仕事は能くするけれども少しも落ついて考へないといふやうな人間に對しては、「さうバタ〳〵してもいかぬ、考へなくてはいけない」といふことが意義をなすけれども、考へてばかり居つて寢ても考へ起きても考へ、それで何もしない人に對しては、「考へてばかり居つても仕方がない、仕事をせよ」といふことが起るのである。さういふことは道德でも宗教でも社會教訓でも、所謂按排から起ることが非常に多い。けれどもさういふ唯だ一時の對症療法的なことは、佛法では之を悉檀――爲人生善といふて絕對の意義を有つものではない、その人の爲に善い事をさせやうとするから、考へてばかり居つても働かぬ者の爲には、「人間は働かなければいかぬ」と言つてその人の缺けたる所を補つて行くのである。

さういふ事が、政治上から考へたり或は一時的の社會教化をやらうとする人の頭腦には始終動いて、その時弊を見てこれに對應することのみ考へる、故に偏つた考へが起つて來るのである。西洋の文化に非常に偏つて行つたから、そこで儒教をやつて見たらどうかといふので、大東文化會といふやうなものが出來る。その觀察は宜しいようだけれども、併し唯だ一時の弊害を見て俄かにびつくりしたのであるから「これではいかん、何をやらうか」「何と言つた所で急に間に合はぬからやはり儒教でもやらうか」「それが宜からう」といふやうなことで着手するのであつて、「團子ばかり食つて居つても胸がやけていかん、今度は何にしよう」「鮒が宜からう」「鮒が宜ければ鮒にしようが、揑り鮒にしようか卷き鮒にしようか」といふやうな譯である。さういふ譯のものではない、我國が永遠の使命を帶びて立つて居る、この帝國臣民を教化する所の教の方針は、左樣に一人や二人の文部大臣が代る度毎にグラ〳〵するやうでは宜しくない。餘りこの精神指導の方針を輕く見過ぎて居る。歷代文部大臣のせられた事柄に就て詳細に調査研究して見たならば、そこに恐るべき缺點があることを發見するであらうと思ふ。現在もその弊を傳うて居るのであつて、決してそれで安心ちやといふことは出來ない。故に精神界に偉人が出たならば、この點に向つて猛烈なる攻擊を試むるものであらうと思ふ。吾々はその人でないから遠慮して言はないのである、「言はなければならぬものぢや」といふことだけは知つて居るけれども、その人にあらざるが故に默つて居るのである、日蓮聖人が出られたならば、これは決して默つてはお出でにならぬと思ふ。

それであるからどうしても我國の精神文化を整頓して行くが爲に、哲學、宗教、道德に就てどういふ意味のものを採り用ひるかといふことが問題になるのである。その他は皆小さな問題である。今日は勞働問題がどうちやとか、或は經濟問題がどうちやとか言つて、これが一番大きいと思うて居るけれども、それは第二、第三に屬する問題である。さういふ所から議論を立てるから間違ふ、議論を途中から立てたら必ず間違ふものである、議論は根本に戻してそれから出て來なければならない。家に就て考へて見ても能く判かる、唯だそこに現れた事柄だけ見て、親父が朝寢をして威張つて酒ばかり飲んで居るといふやうなこ

とから、息子なり嫁なりが文句を言うたといふ所から出發して、「それは親父が惡い」といふやうな論をしたがるのであるけれども、親父が朝寢して居るのもいかん、酒飲んで居るのもいかん、成る程その事柄だけはいかんけれども、日本の家庭に於ける親父その者といふものは、さう一概に叩き込むべきものではないといふことが根本にあるのである。その根本問題を考へずしてそこに現れた事だけを以て判斷しようとしたならば、何時でも物は間違ふのである。今は資本家が不景氣で困つて居る、之をどうしようか、或は勞働者が憐れな狀態に居る、之をどうするかといふので、それが第一の問題のやうに考へるけれども、さういふ者に委して置いたならば、資本家が勢力を得ても世の中に害毒が滿ちるし、勞働者が勢力を得ても決して幸福には行かぬ、今日いろ〳〵やつて居る所の事柄は所謂勢力の均衡で、力のかねあひで持つて居るけれども、思ふが儘にどちらかに勢力を與へたならば、その結果はすべて失敗といふことを意味して居るのである。吾々はこんな危い文化の上に進んで行くことに滿足すべきでない。

その證據は一番烈しく現れて來るのが政治界であるが、甲が來ても乙が來てもグラ〳〵して居つて、少しも安定はない。帝都の復興事業などに就て考へれば最も明瞭である。この我國に於ける空前の大事變に遭遇して、その震災中に組織せられた所の山本内閣はどうであつたかといへば、アヽいふ不祥事件に依つて辭職をした。その後に現れた所の清浦内閣はどうであつたか、又今日現れて居る内閣はどうであるかといふやうな變遷の跡を見るといふと、山本内閣でも清浦内閣でも、又今日の加藤内閣でも、これで確かに安心だ、萬事萬端順序よく行くといふ事は言はれないと思ふ。それでは今の内閣が更つたらうまく行くかと言へば、やつぱり駄目だといふ事になる、非常に危ないことである。その事に頭を突込んで居る者にはわかるまい、政友會がよいとか憲政會がよいとかいふけれども、吾々が公平に横から見て居ると、皆落第といふ事になる、そこに國内人心の不安があり、社會の動搖が起る。國民が政治に信頼を失ふといふ事は、國家に取つてはこれ位危險なことはないのである。又經濟上の狀態がどうであるかと言うと、これ亦世界的關係に於て日本の經濟の基礎は破れてしまつて居る、非常な不安な狀態に置かれて居る、誰もこれなら安心といふ事は出來ない。

さういふやうなことは何から來るかといふと、これは必ずしも經濟政策がわるいとか、政治家がわるいとかいふのではない、モウ一つ本に大切な文化、即ち精神文化を、實業家も政治家も如何なる者ももつと〳〵強く尊敬をする方へ戻らねばならぬ、詰り文化の根本を誤つて居るが爲に起ることである。小さな問題ではない、内閣總理大臣を取りかへたら宜いか、文部大臣を誰にしたら宜いかといふやうな問題ではない、モウ一つ大きな文化の根本方針が確立しないことに依つて、幾らやつてもうまく行かぬといふ結果に陷つて居るものではなからうかと自分は考へるのである。

それ故に我國に取つては、一言にして言へば聖德太子の再來を希望するといふことを國民は考ふべきである。丁度一昨年であつたか聖德太子の千三百年の大祭典があつて、その時には皇室からも多額の祭祀料が下賜せられ、攝政殿下は歐洲にお出でになる海の上から電報で祭祀料をお下しになつた。さうして勅許を經て久邇宮殿下が總裁になられ、德川頼倉侯、澁澤子爵などが會長、副會長といふことで聖德太子のお祭をした。寄附金も割合に澤山寄つて六十三萬圓かあつた。それは國民が聖德太子に對して慚謝をして、明治維新以來聖德太子を押へこみ、佛法を叩き込んで來た所の過ちを悔ひたる有樣であつたのである。

あれで改心したのかと思ふたら、一二年經つ中に又懲が戻つて忘れてしまつたやうな有樣になつて居る、モウ少し手厳しく行かなければ、この癖づいたる弊害は矯らないと思ふ。どうしてもこれは國民として聖德太子の再來を希望すべきである、今の攝政殿下は賢明にあらせられることを承はるから、今の攝政殿下に對して、聖德太子の爲されたる御事跡についてどうぞお考へを願ひたいといふ事を申上げることは、最も大事な點であらうと考へる。吾輩その人でないからそこ迄は申上げないけれども、その人を得たならば、これが國家を救ふところの最も大事な點であらうと考へる。

今日は少しは佛法に戻つて來たのだけれども、併ながら被服厳跡などで震災一周年の追善回向をするからと言つても、坊主もゴタ〳〵喧嘩をするから、惡いのだけれども、宗教に依らないといふことになつた。無論それは各宗の坊さんのやうな譯の分らんゴタ〳〵言つて居る者は役に立たぬけれども、坊主に依らんからと言つて宗教に依らぬといふことは言へないのである、そこが政治家の頭腦がボンクラといふもので坊主などには依らんでも、日本は歴史傳統の上に於て佛法を以て進むべきものである、佛法は坊主の手でなくとも吾輩でも佛法は知つて居る、それを坊主の手を離れたら佛法はわからんものぢやと思ふから間違ひが起る。そこで追悼式をやるに就ても何も唱へることもどうすることも出來ない、唯ただ「嗚呼哀しい哉」といふやうな語だけしかいふことが出來ない。それから先きを言ふのは宗教に入らなければならぬけれども、宗教は持つて居らぬからといふへまなことになるのである。

左樣な事を政治上に於ては公平と考へて居るけれども、併し諸外國の政治狀態を見るといふと、如何なる重大なる儀式の場合にもやはり宗教を加味して居る。國會が開かれる場合に於ても大僧正が出て、その國會が無事に進んで立派な決議が出來るやうにといふ事をお祈りすることになつて居る。如何なる場合に於ても宗教のお祈りをすることは差支がない。又今日日本の神道のやうな儀式であるならば、どこでも認められて居るのである、招魂祭の場合に於ても神道の儀式を以てする。神道の儀式を公認する事は無論よいけれども、併ながらそれが聖德太子の場合に於て、國民の宗教としては神道のみに限るものではない、所謂「篤く三寶を敬へ」といふ事を憲法にお示しになつて、その佛法を以て行ふ儀式は、上は皇室より下は國民全體として反對すべきものでないといふ所の國論が定まつて、千三百年の間日本は來たものである。それを打破つたのは明治維新の場合であつて、その仕事がわるかつたといふので聖德太子の千三百年祭に際して、先づ吾々から見れば慚謝の意をそこに現したものであらう。之を何處までも明かにして進んで行かなければならぬと思ふ。

左樣な歴史傳統からのみ考へないでも、之を合理的に今日新しい事實として研究して見ても、そこに戻らなければならぬのである。何故かと言へばこの現代の弊害が何處に在るかといふと、明瞭に人心が物質慾の方に走つたといふことは世界を擧げての定論である。何れの時代と雖も物質慾は旺盛なものだけれども、それを抑制しそれを善化して行くことに於て、道德、宗教、哲學といふものは働いて來たものである。この道德や宗教や哲學のやうな高いものから無れて、唯だ經濟だとか或は生活だとかいふやうな低い事柄のみ考へたならば、何時の時代でも人心は墮落せざるを得んのである。それは問題の押へどころで、どんなえらい人でも、例へば奥さんが非常な立派な學者なり偉人の前に行つて、「どうも今月は家賃が拂へませんが如何いたしませう」と言つて生活の問題を持ち込んだら、どんな學者でもどんな聖人でも「さうだナ

ー、錢が無くちやア困るナー」斯う言ふに極つて居る。何とかいふ先生は大晦日になつて、妻君が「隣家では餅を搗いて居ります、家では餅が搗けません、坊やが餅搗きの音を聽いて歸つて來て、家では何時餅を搗くのかと云ひます」と涙をほろ〳〵零して言つた。仕方が無いから默つて羽織を脱いで與へたといふことがあるが、さうなれば生活の問題ぐらゐ重大なものはない。けれども人間は食ふ事だけが一番大切なのではない、その餅を搗くことも出來ない家庭に於ても、その親父が聖賢の道を修めるとか、或は社會國家の爲に考へて、子供に餅を食はすことは出來なくても、着て居る羽織は脱いでも、尙ほ且つ聖賢の書を讀み續けて行く所に大なる文化の光が存するのである。所が近來さういふやうな議論をみな蹴飛ばしてしまつて、それは間抜け野郎ぢや、子供に餅を食はすことが出來ないで本ばかり讀んで居る、そんなばけ野郎は叩きつけてしまへといふやうな議論が勢力を得ることに於て、今日は世の中が頽廢して來たのである、これは世界を通じてさういふ大きな過ちに陷つたのである。人間は唯だ低い方ばかり考へたならば何時でも墮落するものである。四十二章經といふお經は、佛教が支那に始めて渡つた時に竺法蘭といふ人が佛法の要點を集めて簡單な物にした、即ち二十四箇條に佛法の要點を纏めたお經であるが、その中に非常に强く論じてあるのは今の事である、人間の自然の慾望を見たならば「財色の慾」と言つて、金錢と男女の慾望に歸する、その財色の慾は「外なし」と言つて際限のないものである、なんぼでもその慾望は募つて行くものである。道の爲にするといふやうな心は餘程修養努力を加へんければ出て來ない、財色の爲にするといふことはそんなに鼓舞奬勵しなくとも、女房は臍くりを溜ることばかり考へ、息子は毎晩夜遊びに飛出して行くやうになる。財色の爲にするものは「それが宜しい」といふやうなことを少し許したならば、滔々として天下は腐敗するものである。「財色の爲にすると道の爲にするとの優劣は天地の相違がある」と迄說いて、始めて道の爲にする者が出て來るといふことを佛は仰しやつて居るのである。財色の慾は外なし、道の爲にすると同じものぢやと言つたならば、天下は滔々として腐る、況んや道の爲にする者はとばけて居るナンと言つたならば、激流の如き勢ひを以て人間は墮落してしまふ。それを現代はやつたのである。道の爲にするナンと言つたら腹が減つてしまふぢやないかと言つて、財色の慾望を煽つたが爲に、世界を通じて激流の如く世の中は顚倒りかへつた譯であると思ふ。之を人類の永い歷史から、將來永遠の未來に就て考へたならば、所謂現代は非常な人類失敗の幕であると私は考へる、世界を通じて、古來の偉人が骨を折つて拵へて呉れた文化を破壞して居るのである、その結果がいろ〳〵な事に現れて、國が壞され道德が壞され社會が壞されて來るけれども、その根本は世界を擧げて精神文化を傷つた爲に起つて來る所の餘波である。

この事は聖賢の敎から考へても孟子は「何ぞ必ずしも利を曰はんや」と言うて居る、孟子が梁の惠王に會うた時に、どうしても金が無くばいけないといふことで、金の話を王樣がした、孟子はいきなり之を蹴つて「何ぞ必ずしも利を曰はんや」國を治めるとか世の中の爲に盡すといふ事は、唯だ經濟の問題が根本をなすものではないといふことを論破した。この眞理は決して變るものではない、經濟を無視するといふ事はないけれども、その先後する所を知らなければならぬ。「本末を知れば道に近し」で、どうしても先後する所を誤つたならばあとは皆壞れてしまふものである。又孔子の敎に於てもその點は頗る明瞭になつて居る。

又我國の神ながらの敎から言つても、決して利に依つて立てられた國家ではない、所謂正しきを養ひ光を顯はさんが爲に與つた國家であつて、さう卑しい所の國民の物質的利益をはからんが爲に團結をしたものでない、皇室の千代八千代に榮えますのも、皇室の低き慾望の御爲ではない、皇室がお有ちになつて居る所の偉大なる天職を實現する爲に、天津日嗣の皇統が續いていくのである。そこが一つ違つたならば日本の國家の存立は意義をなさんことである、國が永く續いたといふても何の爲に續くか分らない。所謂悠久は物を成す所以であつて、天壤と窮りなく續いて行く日本の國家は、そこに偉大なる事業を完成するといふことでなければならぬ。

人間は長生きして見た所が何も善い事をしない、嘘をついたり泥棒をしたり惡い事ばかりするといふならば、實際は早く死んだ方がよいのである。牢から出て來て直ぐ又泥棒をし人を殺して又牢に這入つて行くといふやうな人間は、國法では死刑にするだけの罪の無い奴は生かして置くけれども、本人から言うたならば牢から出た晩に直ぐ泥棒をしなければならぬやうな奴は、牢の中で舌を切つて死んだ方が宜からうと思ふ。人間の生存は必ず善い仕事をしなければならぬ、國家の生存もやはり必ず善い仕事をしなければならぬ、善い事をするといふには、「財色の慾」を煽つて居つては出來ぬ。國が榮えたならばその國民が財色の慾望を恣にして、道などは棄てゝしまふといふ事になれば、その國家は意義なき所の禽獸に等しき國家である。何ぼ政治がうまく行き居る、經濟がうまく行き居ると言うて、東京が復興して道路が廣くなつて商店は皆鐵筋コンクリートで出來て賑はしくやつて居ると言つた所が、そこに何等道念なく清き精神なくして大勢の者がビールを飲んで唯だ歡樂に醉うて居るのであつたならば、それを祝福する事は出來ないのである。のみならず左樣な精神ではそのビールを飲むことさへも出來なくなるのである。それは互に自己の利益の爲に相爭はんとするが故に、勢力を相殺して全體としては寧ろ衰へて行くものである。資本家と勞働者とが鬪ふ、團體と團體とが衝突する、政治も黨派と黨派と軋轢するといふやうな無駄な事ばかりやつて居る、市長を何とか穴を搜して倒す、終には市長になりてが無くて困る、結局總體としては無駄仕事をやることが非常に多くなる、だから利益は得られない。商賣のかけひきが烈しくなつて、嘘の吐き合をすれば、裁判ばかり起さなければならぬ。金を貸した奴は半分返したけれども逃げてしまつたといふやうな事になつて、結局うまくいかん。手數ばかりかゝつて結果はうまく行かぬのが日本の經濟事情であると思ふ。

吾々は餘り詳しく知らんけれども、そのかけひきの模樣といふか、騙し合ひの狀態といふものは、ちよつと考へて見ると橫面を毆つて强奪らぬだけで、殆んど總てのやり方がちよつと油斷したならば强奪るも同じことである。バラックならバラックを建てる時分でも一坪が幾らで出來るか分らぬ。この統一團を建てる時分に見積をさした所が、「今なら材料がありますから四十圓で出來ます」といふことであつた、その位ならば假建築でやらうといふので、この土地の實況を見せた所が、今度は「六十圓掛ります」といふ、僅か三日の間に二十圓も騰つた、今度愈々着手しようとしたら「モウ材料が無くなつたから八十圓です」といふ、段々やり居る內にとう〳〵百二十圓、百三十圓と言つて來たから、そんな事ではバラックなどは建てられない、人を大勢集める所だから小さな物では間に合はぬ、愈々本當にやつたら宜からうといふので、遂に斯ういふ建物を他の方で買入れることになつたのであります、さういふことでも實にそのやり

方を考へて見たならば、ひどいものである。今日地方に行けば百圓か百十圓ぐらゐでちよつとした普通の家は建つのである、東京では私の寺の境内に憲兵の居る所を拵へてあるが、坪百五十圓かゝつたといふ、それを賣拂ふ時には十圓にしか買手がない、一年經たないのに百四十圓は無駄になつてしまつた、左樣なことを今の日本は始終やつて居るのであります。

斯ういふやうな事柄も、我慾さへ募つたらうまく行くといふ事の言へない反證だと思ふ。慾さへかけばうまく行くと思ふのは詰らぬ奴である。商賣をするのでもこの反物は一段二圓五十錢だけれども、此奴ちよつと錢の勘定を知らんやうな親爺だから三圓五十錢に賣つてやらうといふ、さうして一圓餘計に儲かつたと思うて居るけれども、それが結局して決してその人の幸福にはならないと思ふ。永久に利益を全うするには道德と人格が伴つて、所謂昔でいへば暖簾といふ商人の信用、又仕事師なら仕事師の顏にかゝるといふそれだけの人格といふものが成功の本をなすのである。それは半面に所謂道德なり宗敎なり、さういふ精神生活が加はつて、始めて成功はあるのである。

國家を擧げて考へてもその通りである、單に利權をのみ逐うて進む國家は必ず躓くものである、その證據は獨逸が明瞭なる手本である、そのお手本は世界に段々後繼が出來居る、亞米利加は第二の手本である、必ずこれは躓くに相違ない、諸君等が少し長生きをして見て居つたならば、屹度「ハ、ーやつたナ」と思ひ當る時が來る、バタリと倒れるに違ひない。それは成金の非常な贅澤をして居つたやつが、一年經たずして執達吏に出會ふのと同じ關係である。亞米利加は人は見やうに依つていろ〳〵正義の國だなどゝ言ふけれども、斷じてアゝいふ國は正義でない、やはり物質慾に流れて居る所の國家である。表面少しの社會事業みたやうなことはやつて居る、それは成金でもやるのである。唯だ魂は決して出來て居るものではない、出來て居る國ならばアゝいふ猾いことはやらぬ、歐洲戰亂に參加したやり方でも、散々儲けるだけ儲けて置いて、途中から參加して、平和會議には威張つて口を利いて居る、あのかけひきの工合はどうしても成金根性の國家である、アゝいふ國は信賴するに足らぬものである。

それ故に今日は新しい事實として研究して見ても、どうしても精神文化に入らなければならない、西洋から來た色々の學說、大變うまいことを言ふやうだけれども、大體政治論も經濟論も文化方針といふものが私の見た所では大部分間違つて居ると思ふ。今日日本はそれを眞似して行き居るけれども、これは覺醒めなければならぬ。「亞細亞にかへれ」といふ聲が大分あるが、眞に日本は亞細亞にかへらんければならぬ。所がまだ中々これはかへうはしない、「かへらんければならぬかナ」とは思うて居るけれども、足はまだ〳〵向ふを向いて行き居る、本當にあとにはかへらない。政治上の事柄に就てもこれから普通選擧も行はれていく、これは皆向ふを向いて進んで行き居るものである。普通選擧そのものが原理として惡い事はないけれども、實際に之を行うて見たならば、「アゝこれはえらい事をやつた」といふ結果に屹度陷る、これは吾輩が今から豫言して置く。理窟では成る程人權を重んずるのであるから普通選擧はやらなければならぬ、それはそれに違ひないけれども、歷史の違つた日本に於て普通選擧を行つたならば、その結果は數年ならずして諸君の面前に展開される、必ずや碌な事はない、それからそれへと絡んで社會を非常な混亂に導くものである。さうして一番大事な國家の興廢に關するやうな對外關係の場合にも、擧措を失するやうな事が起つて來る、さうして日本は躓くのである、表面から言へば普通選擧を行ふのは人權を尊重した、

善い事をやつたと考へるであらうけれども、さう簡單にはいかない。

又經濟上の事でも、工業の發達は結構なやうであるけれども、それが爲に急激なる大工場組織の發達した結果、非常に人心が惡くなり贅澤になつたといふやうなことは、これは確かに工業組織の變化から來るのである。さういふ生產品が澤山出來てそれを供給して呉れるから需要者が出來るのである、眼の前に立派な物を見せられるから之を買ふ者が出來て來る。必ずしも本人自身が贅澤になつたのではない、何も知らぬ者が三越なり或は銀座の通を通つて見て、こんな物がある、これは珍しい、一つ買つて行かうといふやうな譯で段々贅澤になつて行くのであるから、民度に應じない所の工業が發達をして、無暗に生產が進歩して行くといふ事も、必ずしも善い譯のものではない。だから日本は日本の適度の發達をするといふことを考へて置かなければならぬ。

その他文學といふやうな事でも、從來日本の文學は相當に意義があつて、淨瑠璃でも芝居でも小說でもその他文學といふものはそれを讀み或はそれを見れば幾分か精神文化の方に進んで來たものである、八犬傳であるとか、忠臣藏であるとか、今日は之を舊いといふけれども、洵に立派なものである。さういふ物を悉く嘲つてさうして新らしがりの新派劇のやうな物とか、新しい小說のやうな物は一體何を意味して居るか、比較にもならぬ劣等なものである。けれどもそれを鼓吹する者が大勢寄つてやるものだから、丁度下手な繪でも皆がそれをもてはやして、二十圓の値打しかない物を五百圓で買ふといふ、そこに又骨董屋がやつて來て、あなたが五百圓なら私は七百圓で買ひますといふやうな事を言つて、段々乘せられて行くのである、小說でも何でも皆本屋がさういふ事をやつて、さうして又之を批評する者が寄つて群つて「非

常によいといふけれども、少しも宜い事はありはしない。碌な小說は今日無い、讀んで見て「ア、これは偉大なものだ」と思ふやうな、精神に殘るやうなものはありはしない。彫刻などの事は吾々には能く判らんけれども、やはり日本の古い時代に於ては立派な物がある、今は理窟だけはいふけれども、見て人心に敎化を與へるやうな彫刻は殆んど無い。外國人はあれでも敎化を與へられるか知らんけれども、何か裸の男が力を入れて變な事をやつて居るやうな形を造つて「それがよい〳〵」と言つて講釋をするけれども、講釋を聽いて見ても一向感心しない。拵へた者とそれを批評する者とが寄つて非常によい〳〵と言つて、唯だ樂屋で聲を擧げて居るだけである、諸君が見ても何程の感化をも受けることは出來ないであらう。やはり東洋人は東洋人の頭腦から判斷しなければならぬ、裸の男が變な事をやつて居つたからと言つて、大して感心出來ない。又女が裸になつて變てこな風をして、乳の所が膨れて居る、そこに人體美があると言つて說明して見た所が、何も感心出來ない。それを知つたやうに「成る程あそこがうまく出來て居る」といふやうなことを言ひ居るのは、病氣に罹つて浮されて居る青年が言ふことである。それを文部省あたりが奬勵して、澤山の金をかけてやつて居る、精神文化が如何に頽廢しても、今日敎化問題が大事であると言ひながら、文部省に於て精神敎化の爲に幾らの豫算を有つて居るか、何もありはしない、さうしてア、いふ繪畫彫刻のやうなことには多大な經費をかけてやつて居る。今の政治がさういふ點に於ても態度を誤つて居ることは明瞭である、これもやはり西洋かぶれの結果である。

それから直接精神問題に就いて考へれば、西洋の宗敎、西洋の哲學、西洋の倫理であるが、これが非常に重い事に考へられて來たけれども、大體西洋の哲學の傾向といふものは恐しく懷疑に陷つてしまつたの

である。西洋哲學から進んで立派な考へを示したといふ人は殆どない、帝國大學の井上哲次郎博士などは哲學者ではあるけれども、併し西洋の哲學者ではない、演說でもする時分には皆東洋的の思想を說いて居る、姉崎博士がその後を繼いで居られるやうだけれども、これもやはり西洋の哲學思想を說くのではない。西洋の哲學だけをやつた人は世人に知られもしない、それは唯だ西洋の哲學歷史ぐらゐを飜譯して出して居る人はあつても、眞に西洋哲學が自分の血となり肉となつて、我國の文化に應用したものは無い、西洋哲學をやれば變てこな疑ひに陷づて間違つたやうな事をする者が澤山出て來た。

それから實證哲學と言つて、人間の智慧で判斷の出來ぬことは一切否定するといふやうな、單に主智的な哲學が發達した。人間の情操なり眞心なりを加へて、普通の智慧でわからん事もモウ一つ進んで行かうとする——智慧で進み得ないにしてもモウ一つ無限の精神力を用ひて進まうとする所の努力を悉く否定してしまつた。ちよつと考へてわからん事は「あゝモウわからん、わからぬ事は仕方が無い」といふやうな淺さりしたやうなことになつて、そこで先づ判ることの方がよいといふ所から、實證哲學は殆んど物質科學の方に入つてしまつた。哲學者が身代限りをしたやうな事になつて、科學の提燈を持ち、科學が生活問題に入つてしまつたから、そこで勞働問題だとか、パンの配給といふやうなことが非常な大きな問題になつて來た。これは抑々哲學者が城を明渡したのが間違つて居る、人間は左樣な肉の生活ばかりが本領ではないといふ事を、宇宙の原理からも人間の本質からもあらゆる點から哲學者が儼然として闡はなければならなかつたものを、「さういふ深い事は分らぬ、分らぬ所に力を入れるのは馬鹿ぢや」「大きにさうだ」……そこで腰を折つてしまつたのは西洋哲學者の大失態である。日本でもそれで腰を折りかけた學者が澤山ある、私等の知つて居る人でも、大分力强く言ひ居つた者が「分らぬ所に力を入れても古い頭腦のやうに思はれるから、そんなことは止めて置け」といふやうになつて墮落した者が滔々としてあるのである。

東洋の文化はさういふ事はない、東洋の文化をやれば其處で腰を折らないだけの組織になつて居る。佛敎でも儒敎でも神ながらの敎でも、其處で腰を折るやうな奴は物の分らん馬鹿者となつて居る。西洋の學問をやれば其處で腰を折つて少しも辱かしげもなく、それを新人だなどゝいふ名譽を與へて居る、東洋ではそんな名譽は與へない、そこが違ふ。西洋の哲學の本領から墮落したやうな者に名譽などを與へる事は文化を誤る根本である、坊主が坊主を廢めて鮓屋になつた、彼奴は中々氣が利いて居る、坊主でまご〳〵して油揚を食つて居るより鮓を上手に拵へる方が感心だ、「君は鮓屋をやつた方が結構だ」と言つて名譽を與へたならば、滔々として坊主は皆鮓屋になつてしまふ、哲學者がその本領を捨てゝそれに名譽を與へたといふ事は非常な間違ひである。

然らば宗敎としてはどうであるか、これは私は「日本人は亞細亞にかへり東洋にかへらなければならぬ」と思ふ。西洋の宗敎と言へば基督敎である、基督敎は吾々は之を異敎として排斥するやうな考へは少しも持たぬ、併し基督敎の敎義の中には眞理から見て不正確なものが餘りに多量にあり過ぎる、非常に迷信的なものである。さうして頑迷なものである、基督敎ぐらゐ固陋頑迷のものはない、己れの敎に反した所のものは首を叩き斬つて蹴飛しても構はぬといふ鬼のやうな精神を有つて來て居る、非常に排他的の觀念を有つて居る。西洋の歷史に於て明かであるが、宗敎の名に依つて戰爭を起し、異敎徒を虐殺することは何とも思はない、猶太敎徒を基督敎徒が虐殺をした、そこで猶太民族は永遠に恨みを含んで今日に及ん

で居る、さうしてそれが秘密結社を作つて金を拵へて、己れ基督教徒の奴等が自分等の國を滅ぼした、今度は吾々が金の力を以て征服してやるぞといふことになつて、それが今日世界を動搖に導びて居ると言はれて居る。基督教はこの責任を分たなければならぬものである。それは餘りに彼等は頑迷である、宗教は如何に自分と意見を異にするからと言つて、刀を持つて異教徒を屠るといふやうなことは、永久に許さるべきことではない。佛教の歴史にも爭は多かつたけれども、異教徒を虐殺するといふやうなことをした者はない、それに政治家が加はつて、例へば日蓮聖人を頸の座に据えたりしたけれども、それは間違つた政治家がやつたことで、當時の念佛坊主が自から「こら日蓮坊主、そこに坐れ、貴樣の頸を刎ねるぞ」と言つて頸を刎ねたものではない。基督教は基督の十字架に依つて、十字架に反對する者は皆殺してしまふといふ勢である。宗教はさういふ慘忍な事をすべきものでない、婆羅門教に對する所の釋尊の態度はどうであつたか、決して左樣な慘忍なことは一度もなさつたことはない、どこ迄も説法教化を以て旨として居る、教を以て諄々として説き覺された、これが進歩した文明である。少し思想が違ふからと言つて刀を持つて撃つといふやうなことをやる、それが宗教であると言つたならば他は推して知るべきのみである。故に西洋の宗教は大いに考へなければならぬ、今日表面に仁愛を説き正義を説いて見た所が、歴史は爭ふべからざるものである。

さうしてその宗教の基礎をなす所の教義が、どうしても東洋人としては迎へる事の出來ないものである。東洋人はそれ以上の宗教を有つて居る、即ち佛教を有つて居る故に、基督の神樣が天地を造つたとか、或は基督が磔になつてどうしたとかいふ事に依つて、決して東洋人は救はれない、基督教に入つて行く人は東洋の文化を知らん人が入るのである、東洋の文化を知り佛教の何たるかを知つた者は一人も行きはしない。釋迦か出でゝ婆羅門教を攻撃して起つた、その釋迦を迎へた所の日本ではないか、婆羅門教は恰度基督教のやうに天地創造の神を説いた、その天地の主宰者、天地創造の神は、釋迦に依つて實に美事に粉砕されて居る、故にどうして基督教を信ずる事が出來るか。之は所他的の精神ではない、高き眞理に上つた者は低き非眞理に滿足する事は出來ないのである、長い間上等の煙草を喫うた者は決して臭い煙草は喫へないと同じである。何も無理に嫌やがるのではない、東洋人の思想はアゝいふ思想に依つて滿足を表する事は出來ない、それを滿足を表しないからと言つて攻撃をするのは無理な話である。人間はそれ以上の眞理に立つたならばそれ以下のものに滿足は出來ない、何も基督教を感情的に反対する事はないけれども、合理的に批判的に觀て置かなければならぬ、それはモウ一つ〳〵の問題に就て言ふ迄もない事であります。

道德はどうであるかといへば、西洋の道德はやはり基督教が長い間支配して居つたから非常に發達が遲れて居る。基督教に委して置いたが爲に、その言ふ所が甚だ粗末なものである。基督教の道德はちやんと筋が立つて居るやうだけれども、宗教的にのみ考へたものであつたから、神を信ずることに依つて一切を極めてしまつた、どんな善い事をしても神を信じなければ地獄の底詰めだといふ、この神を信ずることに依つて道を論じ、神を信ずることに依つて道德を論じたのであるから、丁度眞宗に能く似て居る、信心さへしたならばあとは構はぬといふやうな、あの思想が非常に強い。故にその道德の思想もやはり偏つた思想であつて、次から次に變遷して行くのである。或は快樂主義であるとか、或は直覺主義であるとか、或

は巧利主義であるとか、或は自我主義であるとか言つて、その時代々々に依つて變遷つねなく、少しも一貫した道德といふものを奉じて居らない。だから今日は西洋人がどういふ道德を有つて居るかわからん、唯だぼんやりと自由、平等、博愛といふやうなことを標榜して居るが、さういふことは道德ではないのである、これは唯だ原則である。自由、平等、博愛ナンといふことは原理の上に於ていふことであつて、無論人間は自由でなければならぬ、壓迫するとか虐待することはいかぬ、そんなことは極りきつた話である、どんな平凡な道德と雖も、人間を蟲螻同樣に扱つて蹴飛ばしても宜いといふやうな道德はない、それをえらい大きな事のやうに考へて居るといふのは妙な話である。それは彼等が歷史に於ていろ〳〵惡い事をやつて來て居るからである、例へば女郎のやうな生活をして居る者には自由である平等であるといふことが意義を有つけれども、普通の生活をして、日本の家庭の如く、親は慈愛の精神を以て子供を育てゝ居るといふ所に向つて、「自由ぢや」「平等」ぢやといふた所が少しも用をなさぬ。今まで日本人は決して自由を奪はれては居ない、日本人は相互の間に於て決して人格を侮辱して居ない、西洋から來ていろ〳〵の事をいふけれども、日本では例へば奉公人の婆さんと雖も、其處の奥さんは、「婆や、疲れたらうからお茶を飲みナ」といふ位で、實に親子の如く兄弟の如く、飯焚き爺でも庭掃除の爺でも「爺や、綺麗になつたナ、菓子があるが一つたべないか」と言つてお茶でも菓子でも一緒にする、本當の自由平等といふものが行はれて居る。彼等は口でいろ〳〵な事をいふけれども、今日亞米利加に於てはどうであるか、日本人さへも差別待遇をして居るではないか、これだけ進歩して居る日本國民を擧げて人間一人前の者として見ないといふ、六千萬の國民に向つて侮辱を與へて、何の自由平等があるか、他は推して知るべきのみである。そんな者の云ふ所の自由や平等や博愛の屁を抵つて、「成る程御尤です」と言つて附いて行く、之を賢明と云ふことが出來ようか。さういふ點に於て西洋心酔の思想が強過ぎで居る、彼の文明を相當の敬意を以て研究することは宜いけれども、決して彼は我が師匠とするには足らないのである。

その他の道德の問題でも決して尊いものではないと思ふ。大抵の場合に爭ひを奬勵して居るのである、資本勞働の關係も爭ひを奬勵して居る、政治の方でも競爭といふ事を非常に強く主張して居る、經濟の問題でも貿易の上に於ては帝國主義を奉じてやつて居る、小さく考へれば親切のやうな所があるが、全體としては未開の國の利權を强奪くるのを方針として居る、詰らない物を持つて來て高い錢を取る、丁度日本人が北海道のアイヌなどの所に行つて、僅かの物をやつて——酒を一升やつて、さうして熊の皮とか鹿は鮭を百も百五十も取つて來る、それと同じ樣な事をやつて居るのである、日本でも始めの頃は彼等から何でもない物を貢つけられて澤山の金貨を取られたのである、ギヤマンなんと言つてランプのホヤ見たいな物でも五兩も奪くられる、さういふ事で日本の金を皆取られた、少しも親切にやつたものではない、それが思ふやうに行かなくなつて、今度亞細亞をやらうとした所に日本が覺醒めて「どつこいさうはいかん」と言つたが爲に、遂に彼と戰爭をするやうな事になつたのである、元からその性根は明瞭なのである。故に決して彼等のいふ所の道德觀念は信頼するに足らん、隨つて日本人は大いに覺醒めなければいけない、彼等に屈從する事がいけないのみならず、彼等の或る者を鞭みにして信頼することは出來ぬ、何時でも如何なる迹約でも、如何なる不正の事でもやり兼ねない人間と考へて、これに備ふる所がなければならぬ。それは日米の關係を見ても日露の關係を見ても、その交渉談判の經過は明瞭である、少しも品位人格あ

る者の應對振りではない。露西亞がやり居る有樣でもさうである、無理に話を纏めなければならぬと思ふから、日本が讓歩に讓歩をして行くけれども、ニコライエフスクの事件でも日本人を八百人も虐殺した、その虐殺に對する責任を帶びないといふ、その爲に今薩哈嗹は占領して居るのである、それを「あの事件は今度の交渉とは關係が無い」と言つて切離してしまはふとする、之を切離したならば又文句を言うて結局その責任を免れようとする、丁度普通の談判でいつたら「それはお前の顏を立てる爲にその事は書附であやまるから、こつちの相談に乘つて呉れ」といふ、終ひには「書附は要らぬ、口で謝罪るから」と言つて誤魔化すやうなもので、今度愈々薩哈嗹の利權問題に入れば、何とかかとか言つて應じない。あのやり方といふものは、露西亞人は何と思つて居るか知らんけれども、アヽいふ人格の無い者は決して信賴するに足らぬものである、どういふ風にでも豹變する人間として見なければならぬ、政治家は何といふか知らんが、吾々は公平なる立場から見て洵に氣持の惡い人間であるといふ事が分る。

亞米利加の排日の順序でも、ずつと前からやつて來た所の經過といふものを、茲に國際裁判官でもあつて訴へて出て、その順序次第を見たならば、實に性のわるい安達ケ原の鬼婆のやうなやり口をズッと續けて來て居るものである、さういふ人間を信賴することは出來ない。故に日本人は本當に自分の力に依つて立つ決心をしなければならぬ、それには國民の精神を日本的の立派な精神に戻さなければならない。

さうするにはいろ〳〵細かい問題はあるけれども、根本に戻せば日本の精神文化を復活して來るより他はないのである、勇ましく復活しなければならぬ、曖昧な小さな會に依つて、大東文化會といふものがあるから、それを扶けて行かうとかいふやうな、一部分の私の會合に託すべきものではない、日本の國家文敎の方針として大いに論議せられなければならぬ。私は文政審議會が出來た時に、さういふ問題を論議するものだと思うた所が、唯だ小學校の義務敎育年限を延長するとかしないとかいふやうなことだけを論じて、それも極らずに今日まで來つたといふのを見て、文政審議會ナンといふものも詰らないものだと思つたのである。そんなことは小役人が研究してもわかることである、小學校の就學年限を延ばすか延ばさんかといふやうなことは、本當に考へたら誰でも直ぐわかることである、何もそんなに大勢の人が寄つていつまでも考へて居らなければならぬ程の事ではない。日本の文政文敎の根本方針を立つることに於て、相當の人間が寄つて方針の確定をしなければならぬと思ふけれども、さういふ事は指いて問はないのであります、掛聲ばかり大きくして內容は實に詰らぬ、それも又大臣が代つてしまへば、「前の大臣は骨折つたけれども俺は又少し意見が違ふから、今直ぐやる譯にもいかぬ」といふやうなことで、何をやつて居るのか實に國家をもいやにして居るものである。さう斯うする中に國家の大事がそこに迫つて來る、であるからどうしてもこれは國民が一齊に覺醒めなければならぬ。

私はこの意味に於て東洋文化の整頓が大事であると思ふのである。これは屢々申上げる通りに、我國の精神文化は三つの系統があつて、神ながらの敎、聖賢の敎、佛陀の敎といふ三つが協力一致して進んで來たものである。この中に偉大なる哲學もあり、宗敎もあり、道德もあり、その他あらゆる文化を指導する所の方針があるのである、之を見捨てた時はもはや日本は亡いといつて宜いのである、日本に於て佛敎を捨て、聖賢の敎を捨て、神ながらの敎に背く時は、日本は亡びてしまふものである。幾ら西洋の文明をまるきりその儘持つて來ても、西洋の文明では日本は立たない、西洋の文明を間違ひなく日本に移植しても、

それは歴史が違ひ、事情が違ひ、すべてが違ふ、であるからそれは日本でなくして變つた別の國になつて續いて行くに過ぎない、そこで飯を食つて生きて行く事は出來るだらうけれども、日本の建國の精神、日本民族の傳統的の民族精神は亡びてしまふ、詰り人間としては生きて居るけれども、日本の國家としては亡びてしまふものである。之を何處までも日本の國家であり日本人であり、そこに有つて居る使命天職を果すべく進んで行かうとするには、何が大事だといつても一番大事なものはこの精神文化であります。

それは今いふ三つの敎を大切にしなければならぬ、この敎に背くやうな者は、即ち國民が擧つて之を排斥しなければならぬ。文部大臣として佛敎に對する觀念を確立せぬやうな者が出て居るのは國家の深憂であります、そんな者を文部大臣にして置いてはいかぬ、初めの頃はわからなかつたか知れんけれども、最早や明治已來五十七年の歲月を經過して今なほ佛敎に對して何の考もないやうな者を、少し位行政的手腕があるからと言つて文部大臣にするといふことは間違つて居る、この際にはモッと人の精神の奧を支配する文敎方針の分つた人間が出て來なければならぬ。この意味に於て日蓮敎徒は、日蓮聖人が鎌倉幕府を諫諍したが如くに、今後はどうしても爲政者に向つてさういふ間違ひがあるならば之を極諫して行くべきであると私は考へて居る。

そこで今簡單に申上げて置きたいと思ふのは、この三つの敎は何れも大事であるけれども、殊に佛敎が大事である。佛敎から離れての神ながらの敎はどうしてもそこに基礎が薄弱になつて來る、傳統的の史實としては尊嚴無上なものであるけれども、傳統のみを根據にする思想は今日は非常に薄弱である、無論今まで傳はつて來た歴史傳統は重んじなければならぬ、けれども「斯ういふ仕來りであるから、どういふ

譯かわからんけれども、斯うやつて來たものだから、さうしなければならぬ」といふ事だけでは、今後の人心を繫ぐことは出來ない、之を重んじて行くのは無論であるけれども、モウ一つ合理的に根本を說明しなければならぬ、神ながらの敎だけになつて來ると、唯だ「さういふ仕來りである」といふことになつてこの頃方々の神社の祭典でお神輿ならお神輿を擔いでワッショ〳〵やつて居る、「どういふ譯でやるのか」「どういふ譯といふことはないけれども先祖代々やつて來た神田の祭禮ぢや」「一體何が祭つてある」「何が祭つてあるかそんな事は知るものか」といふ譯で行くのであるから、それでは今後の東西文化の接觸に對しては非常な薄弱なものである、その事を維持して行くにはモウ一つ强く根本を握らなければならぬ。儒處もやはりさういふ點に於ては薄弱な所がある、儒處は天道明德の敎として非常に尊いが、併し天道といふものはどういふものかといふ哲學的思想が展びた時、說明に困るのである、「お天道さま」といふとお日樣のやうにもあるし、何だかその外のものゝやうでもある、人格の無いものゝやうでもあるし、無い者を假に天道と言ふのぢやといふやうな氣分もする、まるきり無い者としても工合が惡いといふやうなことでマゴ〳〵して居る、之を儒者に聞いても答辯がつかぬ、國民全體に投票さしても、結局譯がわからんやうな所が結論である、さういふもので今後の人心を繫ぐことは出來ない、佛敎が之を助け成せば天道も活きて來るし、明德の敎も光あらしむるのである。佛敎は兩刀使ひである、自分は無論獨立獨歩で誰からも保護を受けない、儒敎の援護や神ながらの敎の援護を受けないで、世界文化の中に獨立部隊として縱橫無盡に闘ふことが出來る、他の援軍などを要しない、これは一番强いものであるから、守備隊となれば佛敎だけで守備するし、攻擊隊となれば他の援軍などを受けないでも、獨立隊で西洋の哲學と闘へといへば闘

ふ、西洋の宗教と闘へといへば闘ふ、西洋の道德とも闘ふ、宗教、哲學、道德この西洋の三部隊を佛教一つで引受けろといへば引受ける、それだけの佛教は力がある。坊主や信者には力が無くなつて居るが、佛教そのものは確かにさういふ世界の文化の中の獨立隊として縱横無盡に奮闘する力がある、それは間違ひない事である。けれども儒教や神道は之を獨立部隊として闘ひを開いたならば危いのである、そこに佛教隊がちやんと援護隊に入つて居らなければならぬ、丁度北清事變に際して聯合軍を作つた時でも、英國の陸兵が弱いといふと、日本兵がそれに混つて行つた、或は今度の青島の攻撃の時分に、英國兵も混へたけれども、それは少しばかり眞中に挾んで、やはり日本兵が主となつて行つたものである、丁度さういふやうに、神ながらの教でも儒教でも使はなければならぬ。それがわからないで儒教が獨立部隊として西洋の文化と闘へると思うて居る人は、今日の文化戰を語るに足るべき人ではない。

それは何故かと言つたならば、儒教は實踐道德の上に方針を置いて立つたものである、決して哲學的の基礎から考へて居ない、強いて哲學といへばそれは儒教哲學といふものもあるけれども、さういへば床屋哲學もあれば風呂屋哲學もある、商賣哲學、何でも哲學といふ字を喰つければ哲學になるが、純正哲學の本當の哲學と稱するものは、宇宙の原理の根本を明かにすべきものである、人間に就て言へば人間の本質本體のその根本を明かにしなければならぬものである。それから以下の算盤哲學であるとか、かけひき哲學といふやうなことは、哲學といふ言葉を濫用するものであつて、醇乎たる哲學といふものはそんなものではない。儒教はその哲學的の基礎が確立して居ないのである、哲學の大事なことは宇宙の原理と、吾々人間の本質である心を說明することが必要である、儒教では心は永遠に存在するものやら、心の本質本體はどういふものやらわからん、唯だ暫く心をそこに假定してある、だから生れぬ先から心が續いて居るやら、死んで後まで續くやらわからん、消えるとも言はず消えないとも言はず、「それはちよつと待つて呉れ」といふやうなことになるから、哲學としては行止りである、神樣が靈魂を造つたとは言へない、ポカツと其處に生じたとも言へない、「そこの所はマア極めないで置くのだ」といふやうな譯であるから、人間の性を論ずる上に於ても、性は善だとか明德があるといふけれども「どういふ譯でそれがあるか」「それは聖人が言うた」「聖人が言つたつて勝手に言つたのかも知れんちやないか」といふことになつたら、二つ三つ附込まれたらモウ答辯が出來ない。宇宙を說明することに於ても大德とかいふけれども、「大德とは何ぢや」「何ぢやと言つて大德だ」といふ譯で、殆んど哲學的の研究は出來て居らぬ。儒教でいくらか哲學味を帶びたのは佛教の言葉を籍りて「大極は眞如の如し」とか「陰陽は阿賴耶識の如し」といふやうなことを言つたのである、けれどもそれも佛教を本當にやらんから間に合せの議論であつて、宇宙觀に於ける哲學の基礎も頗る薄弱である。さういふものを以てこの東西文化の闘ひの先頭に立てることは出來ない、儒教を役立たせるならば實踐道德の上に於てである、それは仁義忠孝の教といひ、いろ〳〵實行道德の上に於て優れた點があるけれども、哲學的基礎の上に於ては弱い者である。

神ながらの教も歷史傳統の上から言へば、國體の淵源する所、及び日本の大事な事柄は神ながらの教で極つたのであるけれども、それは事實がさうなつたといふことを語り傳へたものである。その哲學の基礎を說明しようとかゝつたものではない。だから哲學的に宇宙なるものはどうぢやといへば、天地のはじめは混沌として居つて、清めるものは昇つて天となり、濁れるものは降つて地となつたとか、天の瓊矛を以

て滄溟をさぐり、その雫が凝つて礒馭盧嶋となつたといふやうなことは、傳說としては用ひられるけれども、今後の科學からも哲學の上からも認めらるべきものではない。唯だその神話の中に含まれて居る或る精神を保存することは宜いけれども、それはやはり偉大なる哲學、或は神話哲學とか宗教哲學といふものと併せて始めて考究さるべきものである。神道を神道としてのみ押捲つて居る人では今後の人心を指導することは出來ない。

神道を宗教として考へて行く場合に於ても、多大の缺點を有つものである。所謂八百萬の神といふものは統一神教ではない、一神教でもない、多神教である。頗る複雜なものであつて、さうして誰でも神樣であるから、骨無しの神樣もあれば性のわるい神樣もある、わだつ神といふやうな人の邪魔をするやうな神樣もある、丁度人間と同じやうな有樣である、宗教學の上に於てはさういふ雜然たるものは價値がない。それで進んで行つたならば、基督教の一神教と闘へば、一擊の下に粉碎さるべきものである、その位の事は國民は知つて居らなければならぬ、宗教の闘ひとしてさういふ根本のことになれば、佛法を以て當らなければならぬ。それが情けないことには今日相當の地位に居る人が、却つて國を思ふ精神であるとか、皇室に忠なる所以であるとかいひながら、明治維新の際に王政復古と同時に佛法を斥けて、士族が皆神道になつたといふ、あの譯の分らぬ頭腦が殘つて居る、何故に士族が神道にならなければならんか、物學びする位の者は、日本文化の三教の融合を以て任じなければならぬ、各藩の子弟が或は朱子學に捉はれ、或は復古神道に陷つて排斥的なる態度を以て進んだといふ頭腦が、今日の役人や知識階級の間に殘つて來た、これを大改革をしなければならぬ、眞に思想界の大改善を叫ぶならば何も西洋のア、いふ事情の違つた思想を持つて來る必要はない、我國の本當の歷史、傳統の思想から、明治維新の當時の誤つた態度を改革することに戻らなければならぬ。佛教徒は明治維新の時分に排佛棄釋を叫ばれたその痛弊が殘つて居るからして、氣の利いた坊さんがあつたならば、これは東洋文化の調整に向つて努力しなければならぬ筈である、所が洵に淺間しい事には、小さな考へは澤山持つて居らうけれども佛教を復活しようといふやうな大きな考への人が無い。であるから佛教が今いふ東洋文化の大切な役目を勤めることを考へて居ない、それは又考へられない筈である、淨土經みたやうなものを持つて來るから、文化ナンといふものは頭腦にない、「そんなことは生きて居る人がすることである、吾々はお婆が死んだのを阿彌陀さんの所に屆けるだけの役目でござる」といふから、文化の問題には喙を容れることは出來ない。禪宗は立派な宗旨のやうであるけれども、人生を馬鹿にして與つたものである、人生の是非は共に非なり、善いといつても惡いといつても高が知れて居るぢやないか、十把一からげにして一山百文ぢやないか、そんなことはどうでも宜いといつて、高きに止つて人生を指導する天職を忘れたものである。さういふ淨土門一流、禪宗一流が佛教を代表するが如く思ふから間違ふ、さうして禪宗坊さんでも或は淨土眞宗の坊さんでも、今尙ほその非を悟らない、左樣言はれると何か攻擊されるやうに思うて氣持をわるくするけれども、その位の事は常識を以て早く悟らなければならぬ。佛教が超世間的であるとか未來的であるとかいふので、維新の當時大打擊を與へられて、再び起つ能はざる所の創痍を受けたのである、これは洵に申譯がなかつたといふことは、五十七年間も考へたならばモウ少し智慧が出さうなものぢやないか。

彼等が覺醒めるのを待つて居つては日が暮れるに依つて、吾々日蓮教徒は急先鋒となつて、日蓮聖人の

立正安國の御精神の通り、

予少量たりと雖も忝くも大乘を學す、蒼蠅驥尾に附いて萬里を渡り、碧羅松頭に懸りて千尋を延ぶ。

弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ、何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さゞらんや。（縱覽遺文錄三八三頁）

この日蓮聖人の大精神を繼承いで、お互に少量ではあるけれども、大乘殊に法華經を學び、法華經を信ずる事が出來たのである。この敎の大精神は今の禪宗や淨土宗のやうな迂遠なものとは違ふので、所謂「天晴れぬれば地明かなり――先づ國家を新つて須らく佛法を立つべし」といふ活き〳〵したる所の文化指導の任に立つて居るものである、死人を扱うたり世捨人を扱うたりするのとは違ふ、活き〳〵して國家社會に奮鬪して行く人を指導する所の生きたる敎が法華經である、この意味に於て自分自身はお互に不束な者で、蒼蠅のやうな者でも、千里の馬の尻尾につかまつて居れば千里を駈ける事が出來る、碧羅は自ら立つ事は出來なくとも、松の樹に縋れば高きに昇るが如く、お互は蒼蠅の如く碧羅の如くであれども、釋尊に依り法華經に依り、日蓮聖人に依り聖人の遺訓に依つて、碧羅松頭に懸つて千尋を攀るやうに、この日本の國情を見て默視する事は出來ない。默つて居つたら誰が言ふか、誰も言はぬであらう、吾々は洵に微力な者であるけれども、國家の現狀は默視するに忍びない、之をこの儘にして數年を過したならば、必ずや眞に國家の大事がそこに起つて來ると思ふ。國內の事情に於ても人心の嚮ふ所、又對外關係に於ても世界的日本の地位、所謂他國侵逼難、自界叛逆難といふ二難まさに來らんとするの前兆歷然たるものである。この時代に際會したる日蓮敎徒は、どうかこの二つの厄難を除く爲に奮鬪をしなければならぬ、それには眞正なる意味の佛法を興隆して、國家を維持しようといふ決心から進みたいと思ふのであります。

總論としてこれだけの事を申上げて置きまして、尙ほ更に詳しくお話を進めて見たいと思ひます。

日蓮主義より見たる無量義經

（第十八回）

井村日咸

無量義經十功德品第三

此品は今經三品の最終にして流通分に當る、前二品に佛陀と敎法との二法を闡明して、我等に救濟を與へらるゝ側を說いたに對して、此品には敎を受くる我等の側を說いたのである、此品には重要なる問題が三ある、一には敎法撰擇の標準を示して菩提の大直道を撰取すべき樣敎へた、大直道は疾く無上菩提を成するの利あり、若し大直道を得ざれば大利を失ふ、險逕を行くに留難多きが如く、遂に無上菩提を成ずるを得む、故に大直道を撰取すべしと示された第二に來至住の三義を問ふに對してお答へに成つた此三義は文字は簡單であるが、其意義は甚だ重大である、宗敎上の大綱は此三字に依つて說明し得らるる、後に本文に就て詳細にお噺をするが、略說すれば、來とは我等に下る救濟の手に就て、何れより來る救濟の手なりやと云ふ事を明して、我等の信仰の源泉を示した、宗敎では、信仰の源泉を充分に意識する事が大切である、佛敎各宗が今日信仰を逸して徒らに哲學的思索に重きを置きつゝあるのは、信仰の源泉を忘れて仕舞ふた爲に外ならぬ、其が爲に宗敎としての存在が疑はしき現狀と爲つた、此經は明かに信仰の源泉に示して「諸佛室宅の中より來る」と說き、其源を如來の大慈悲に發生したる事を敎へたのは宗敎としての佛敎として當然であらねばならぬが、夫れすら忘れられた現代の佛敎は大に反省する必要があるのではあるまいか、次の「至」「住」の二

は我々が如來の救濟の手に攝取せられて、其教に隨順し實行する方面で、所謂行法の大躰を二字で示した、我等の發心は、如來の教に接近する最初の機會なれば、我々の側では一番大切の事である、此最初の機會がやり損になると飛んだ方面に進行する、そこで特に其機會を「至」の字で示して、如來の救濟の御手は我等の菩提に志す其處に垂れらると示された、菩提を求めざるものには如來の救濟の御手は下らないと云ふことに成る、我等の發心正鵠を得て如來の御手に攝取し得らるゝならば、我等は如來の教法に隨順し實行に移つて行かねばならぬ、此處を「住」の字で顯はしたのである、此三字の中に佛我の教觀二門の大綱を盡せりと云ふて能い。

第三に此品には十功德と云ふことを說いたが、凡そ宗教に於て實行を促がし實際的行動を奬勵することは、其實行の効果を收めんと欲するにあることは否むことは出來ない、何等求むる處なく、希望なくして教を信ずると云ふことは有り得べき事ではない、人類の行動は必ず何等かの目的あつての事であることは云ふまでも無い事であるが、宗教も得益と云ふ事を逸しては何等の意義も價値も存在しない事になる、此品に十功德を說いたのは、正しく信仰の結果たる得益を說いたものである、我等の信仰問題も利益を完全に獲得する事に於て其結論に到達する、今經も得益を說く事に於て結末を告げて居る、信仰の源泉たる佛陀の功德を出發點とし、信仰の結末たる得益を最終に說く事に於て此經が最も簡明に秩序整然として信仰問題の要領を得たるものと推奬する所以である、此品の題號は三問題の中に十功德を說けることが比較的に其量が多いに依つて其題號を十功德品と稱したのである、功德と云ふことは利益と云ふ言葉と同し意味である、十の御利益を說いた品と云ふ事である、以下本文に就てお噺をする、本文の科段は十二段に分つ。

爾時大莊嚴菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。世尊說是微妙甚深無上大乘無量義經眞實甚深甚深甚深……中略……所以者何一聞能持一切法故

（二六、七—二七—五）

第一段「正說の經を稱歎す」るので、前品如來の說法に就て教法の根源は一法なるを示して、千差萬別の教法は一法の根源より發生した枝葉に過ぎざれば其源に遡つた其一法を信ずることに就て、一切の萬法に通達し得ることを示したが故に、今は其一法を信ずる事を得たるを稱歎して、此大乘無量義經は眞實に甚深の大法なりと云ふた、而も三度迄も甚深々々々々と操返して稱歎したる事は如何にも其深義なる事の肝銘の深きかと云ふ事が顯はされて居るのである、最後に其理由を擧げて、「一たび聞けば能く一切の法を持つが故に」と云ふたのは其根源を捉へた故であると云ふことで、其根源たる一法を聞いて能く持てば一切法を持ち得ることに於て、勞少なくして功多き結果を得るが故に斯く稱歎したのである。

若有衆生得聞是經則爲大利所以者何若能修行必得疾成無上菩提

（二七、五—仝、七）

第二段「聞經の利と不聞の失とを明す」中に先づ聞經の利を說いた文である、此經は諸法の根源を說くが故に、此經を聞くことを得ば、一切法を受持することを得て、直に無上菩提を成じ、大利益を獲得し得るが故に、此教法に接し得た人々は大幸福と云はねばならぬ、之に反して、此經に接近し得ざりし人々は不幸の人と云はねばならぬ、次の文にそれを說いた。

其有衆生不得聞者當知是等爲失

大利。過無量無邊不可思議阿僧祇劫。終不得成無上菩提。所以者何。不知菩提大直道故。行於險逕多留難故。

（二七、七―二八、一）

「不聞の失」を明した文である、此經を聞かざれば大利を失ふ、何が故にとなれば、其根本を捉へずして、枝葉の教法に滯るが故に何時まで經つても、其根本を了解することが出來ない、其眞理の奥庭を見出すことを爲し得ない、それが出來なければ、如何に時間を經過しても無駄骨折に過ぎない、經に無量無邊劫を過ぐれども、遂に無上菩提を成ずることを得ずと說くは此である、經文に其理由を擧げて菩提の大直道を知らざるが故にと云ふことゝ、險逕を行くに留難多きが故にと云ふ二つの理由を擧げてある、大直道を知らざるが故にとは法を聞かざるが故に知らざるので、法を聞くことに注意を拂はねばならぬことを敎へ、次には實行難を敎へたので、菩提の大直道を知らざるが故に、三乘迂回の敎に依つて修行するが迂回の行は險逕で山の小路を行くが如く迂餘曲折して遂に方向を失する樣の場合が多い、其爲めに中途に挫折して其目的を達することは出來ない、其修行の中間に留難多きが爲に退轉の止むなきに至るものも出來て來る、折角道に志しながら中途に挫折するのは甚だ惜しむべきではあるが、餘りに困難が多いと止を得ざる次第である、其處で其樣な困難な途を辿らないで、平坦たる大直道を行く樣にせねばならぬことを敎へられたので、此一段は我々に敎法撰擇の標準を示されたのである、同じく信仰に入るならば、容易く行じ得て疾く無上菩提を成ずることを得る敎に依つて敎はれねばならぬ、何でも御座れで、手當次第に信ずる樣では、險逕を行くに留難多く、遂に無上菩提を成ずることを得ざる結果になりはせぬか、夫れ故に信仰に入るには敎法の撰擇に就て愼重の考慮を費さねばならぬことゝ思ふ。

鳥物語

篁　雲

炎熱に堪へがたい夏の日の林間生活は涼味を覺へて愉快である、考松巨杉は千古不變の常寂を示し、紅花綠葉は隨緣の妙用を語る、此處に逍遙する鳥類の聲は自然の法軌を謳ふかと思はるゝ。

ある日この林間で鳥類の集合があつた、鳳凰が王さま然として會長におさまり、鶴が副會長格である、おさまらないのは鷲である、而し鷲は倨猛で橫暴であるから衆望がない、幾ら自己が高い評價をしても買手がない、仲間はづれの蝙蝠から異議の苦情がでたが「醜劣なる行爲をなす者節操ない者體質の異なる者」として、鳥類の資格がないとの決定を與へられた、天竺から遠來の珍客迦陵頻伽の美音の聲樂に一同は心醉した、おなじ遠來の客でも雪山の寒苦鳥は怠け者で泣言ばかりいふから誰も相手にしない、此の會合に夫婦琴瑟の鴛鴦や鴨や鵜の水鳥が不參をしたのは物足らない心地がする、最前から會場がなんとなう喧擾する、それは九官鳥が何事にでも口吻をするがためである、制止をすればする程まねる、已むなく九官鳥を退場せしめた。

何れの世界も同じで弱肉强食の脅威を恐れる、同族の平和生存安定の叫びが起る、特に鳥類には此の感想が深い、殊に鳥類通有の悲哀は夜視へない鳥目の悲哀である、何んとか救濟の方法はないかと提案した者がある、これに反對したのは梟である、僞は夜視へる毫も悲哀を感じないと大見得を切る、おまへは晝見へないではないかと叱責せられて、悄々引きさがる、人間世界に持囃さるゝ「燒野のきぎす夜の鶴」母性愛は此方の專責だと自慢する、而し雉を食へば三年の古疵が出るといゝながら、油斷のならぬは人間さまだとおびへる者もある、鶯の谷渡り法法華經の叫びは人間に珍重がられると羨望のまとになる、同族の和合と三枝の禮ある鳩は小身ながら推奬せられた、禮度の亂れは亡滅の基である人間

世界へ勸告してやりたいと威張りだした、烏は矮軀醜黑だとて忌み嫌はるゝが、屢々豫報をして人間世界へ警鐘を與へた、事實は怪辯で儂を陰陽師の再生と推奬して呉れた、あの山形市大火の時儂等一族は三日前に棲宅を變へた、市民は狼狽したが儂等は平氣の平左で人間の顚倒の狀況を笑ふて見ていた。

汚に沈み苦に惱むの悲哀は娑婆の通り相場と見へる、因果應報は必らず廻轉する、利害の打算で一時を苟嬉してはならない、人間世界の士族と鳥類世界の鷲が昔を慕ふであらう、時勢の變遷につれて自然陶汰は遺憾なく行はれ、實力なくして壓蹂したる特權階級は次第に打破せられ、實質ある者は其の地位を確保するは今も昔も變りはない、鷲は落魄しても勤勉で、篤實の鳩の如きは傳書鳩の稱號を得て倍々聲價を高めてをる、烏相應に醒めなければならない。

會場が白けて來た、そこで餘興として、山雀の藝術があつた、技藝は小禽家の特有ではないかとの感じが起りて來る、鳥類の中で呼名は一で種々に書れるのはほとゝぎすである「時鳥、蜀魂、不如歸、杜鵑、子規」など數多あるが、どういふ譯かときけば、それは人間が勝手の感想で吉鳥と見られまた凶鳥と見られる、ほとゝぎす血を吐く思ひで……推了は勝手にするがよい、しかしながら儂を對照として人間の眞情が流露する場合が多い、儂を遺憾なく描出した名歌がある。

きくたびに珍らしければ子規
いつも初音の心地こそすれ

戀歌も澤山あるが風味がなくて情味津々として盡きない、歌は

ほとゝぎす八幡山崎啼きかはす
こへの中行く淀の川ふね

それから恐懼に堪へないのは、順德天皇が佐渡に在ませし時、わびしい黑木の御所より眞野灣頭の山腹に登り給ひ、配岐の方を眺めて父帝の安否を偲ばれた、黑木御所より眞野への中途八幡の里松原にて、儂の聲を聞こしめして、

啼けば聞くきけば都の戀しさに

この里すぎよ山子規

叡慮を恐察し奉り儂は慙愧に堪へない、臣子の分を紊し無道惡逆の大罪を犯した北條を膺懲する者がなかつたか、儂はモー語るの勇氣がないと子規は悲憤の涙にくれた。

儂は果報者である、御皇室には鳳凰の間がある、佛閣大寺には鳳凰の山號がある、物的勢力があつても心的道力がなければならない、今日の會合は實に愉快である、ならうことなら皆が和睦よく暮したい、儂は御釋迦さまから聽た數がある、この機會に話をしようけれども仲間にあたりさはりが出來よう、尊い佛さまが人間を教誡なさる上に、仲間の者が對照になつたまでだ、惡く思ふてくれるなと徐に鳳凰が說き出した。

すべての害毒は慢が本である、佛さまは慢の內容に七慢をあげ、其の外用に八慢を數へられた、儂等の仲間が通有病は慢であるとて八慢の說明に、鵄鳥鵲鷲烏鵠鴉鴿の八名が銘玉に擧げられた。

鵄　盛壯慢
烏　性慢
鵲　富慢
鷲　自在慢
烏　壽命慢
鵠　聰明慢
鳩　行善慢
鴿　色慢

文殊菩薩經に八慢を示し、法華經譬喩品に、

三界無安の醜穢の方面を描寫する時以上の對照があつた。

鳶の高く飛ぶ外に能がない僻に、俺は强健である皆の奴は意氣地がないと自慢をしても心の能力がにぶければ、その日かせぎの鳶と同じでないか、才取を鳶といふまた味ふべきことである。烏おまへは非道な男である、おまへの母親が苦勞しておまへの成育に努めた、巢立のできるようになると、おまへは母親

を殺して餌食にしたではないか、慘忍を喜ぶおまへが正義仁愛を賣物にするなど、眉に唾本氣の沙汰ではあるまい、世に邪智詐謀にして自己利益獲得の時には甘言を弄し、不純不義の榮華に誇り、而も清廉を粧ふ者がある、是等は性慢の部類である。

霜枯の寒さが身に沁む時より儂等の生活はみぢめな痛ましさが刻々現實してくる、この時には乞度食糧問題が持ちあがる、鵲おまへは小禽を食糧として富者氣取で互助共濟の誠意がない、高い空から下界を視ると醜怪なる不義の惡行をなして、巨壯なる邸宅に住み慈愛の精神に缺けながら、富豪然と威張て居るが、彼等の行先や案じられる、太陽の光を仰ぎ改過遷善したがよい。鷲さんおまへは鳥界の勇者である、慾むらくは凶暴である、人間界におまへの對手を求むれば平清盛の型である、自己の力を信じ過ぎ、成すこと成らざるなしとの自在慢に、鹿を追ふ獵師は山を見ずで自己が失敗することになるから慎むがよい。

烏おまへの壽命慢俺は初耳であつた、おまへは陰陽博士で博識である、然るにおまへは隨分惡食をする、所謂坊主の無信心醫者の不養生かね、壽命は保健と修養にある、安心立命が大事だ忘れるな。鵲おまへは小才子だ、近來日本でも榮達を急ぐ、賢明ぶる意思の弱い者が多い、聰明慢は一生を誤るから注意したがよい。一族平和で禮儀の正しい鳩さん、俺は此のような善事をした、彼のような德を積んだなど自己の慈善を賣物にする、おまへには行善慢は玉に疵惜しいな。鶏おまへは美貌家である、虛榮にあこがれ、美裝に浮身をやつし、ハイカラを喜ぶ色慢である、色慢は身を破ぶる本である。

鳳凰は熱心に八慢を話して一同に印證を與へた、時に夕陽は西山に傾く、諸鳥は塒に還るを急ぐ、またの逢瀬を約して作禮而去。

ぬ無限の力となつて現はれる。大力お繁の身を慎みて謹遜なる、如何にも女らしき女、現代の所謂智識を裏の頭にぶらさげたがるはれ子さん達とはてんで段が違ふ。大蔵の事は柳に風と受け流して爭ひを好まぬ優しい氣高い女性美の持主、而もそれがチ、五月蝿いと一度ピンと來たが最後、大の男をギユウと押へて貧乏動きもさせぬお手柄、そうして心靜かに念珠爪繰りてお題目の修行、文王一度怒りて天下を平かにし、武王も亦一度怒つて天下を平かにすとの經典を生讀むがやう、何たる氣持のいい、所業ぞや。

大和民族が牢記して忘るべからざる排日法案實施の七月一日、而も日比谷原頭には加藤首相の施政方針演說のある日、隨分と帝都の人氣は沸き立つた、形勢は頗る穏かならぬ模樣となつた。馬鹿者が何かしら惡事でも演ぜればいゝがと祈つた甲斐もなく、米國大使館の同族を寄集した惡漢が飛出した。由來米國の上下兩院議員がその建國の理想を裏切り、御自慢の正義公道を其方のけにして、無識にも暴慢自高排日法案を決議する杯沙汰の限りである。が併し之に對する報復の手段は、飽る迄慮を要する、輕率妄動は何處迄も慎まねばならぬ、米貨不買同盟なんど、今更支那人の眞似をしたからとて何の價値がある、又今にも戰爭が始まる如く騒ぎ廻るのは愚の骨頂、宜しく非國一致大國民なる態度もて、飽まで合理的手段に依りて本問題の解決に努めればいゝ。日清戰役の終末に三國干涉の事が起つた時も、聖恩自重十年の臥薪嘗膽を實踐した國民ではないか、女でさへ大力お繁の如き眞の勇者を範先に持つ大和民族ではないか毫も悲觀するにはあたらない、正義は最後の勝利者だ、自重反省堂々理路を歩んで彼なして慌ち且つ謝罪せしむればいゝ。

（八）見玉伯の眼力

故見玉海太郎將軍臺灣總督に任ぜられて始めて彼地に赴任した時、「官民合同の大觀宴に招待された、所が酒間を斡旋する婦人を見ると、何れも良家の夫人令嬢とあつて、輙る上品にしとやかな者のみである、將軍の寵愛で共に其宴に招かれた人達、彼地官民が藝者の代りに自分達の夫人や令嬢を出して接待される厚志を感謝しない者は無つた、其中に將軍丈は別に容姿を改めて婦人達に敬意を表する樣な事もなく、宴の撤せらるゝ迄快然として主人側の人々に應酬して居た。而して宴も早や終らんとするに臨み、今一杯の酌を所望して、其に應じて一人の婦人が銚子を持て側に寄ると、將軍は突然其手首を握つて放しもやらず「諸君も侍々甘く芝居を打つたが、我輩の眼を欺ます事は出來ない、之を見たまへ」と云つてカラ〳〵と笑つた。見ると其婦人の白像の如な指にも似ず、マザ〳〵しい綠だこが玄人なることを證明して居た。

外面如菩薩、內心如夜叉とはたゞ心の品騰のみに用ふる詞ではない、人を見たら盜賊と思へとの古語さへある、油斷は少しも出來ぬ世の中だ。が併し兎角は表面の仕こなしにうかゝとつり込まれて、アッとんだ馬鹿を見たと氣のつく時分には、後悔さきに立たず提燈持はあとに立たぬ仕儀。普通の人間の歩み方は難とまあ斯んな物よ。たゞ途々餘士は終らず、底の底、奥の奥まで見透して、其手は乘名の絶給、貴公、途の小刀細工で以て我靈の眼を眩ましようとは、ウヲッハ……と豪然笑ひ、夢は醒めけり夜は明けゝり。喝。

記事

復興の統一團

將來の方策に就て刷新と奮鬪とを協議す

復興已後の統一團は着々陳容を整へ、歩武を進めつゝあるが、更に刷新と奮鬪とを充實する爲め、十月五日午前九時より從來本團のために盡力せられたる關係者百餘名を招待し總裁殿下より統一團の歷史及び將來の方策等に就て懇談せられ、別項の趣意及び規則を實行する事になつた。

統一團趣意書

我が統一團は創立已來實に二十有八年、この間信仰教化の方面に於ては佛教教義の歸趣を闡明し、日蓮教學の正統を發揮し、又思想善導の方面に於ては、東洋文化の權威を高調し、神儒佛三教の特色を宣揚し、且つ相互の調節歸一を鮮明にし、以て人心の頹廢思想の基化を匡救する上に、寄與し來れり。又勞務者の慰安と善導とに努力し、進んで民衆教化の爲に綜樂と講話とを連結し、更に大いに貢獻せんことを期し、斯くて高等教化と普通教化との二面に於て、特色ある成績を擧げんとす。

顧みれば我が國の現狀內外益々多事にして、人心教化の必要頓に其の度を加へ、若し今日に於て尙ほ且つ人心の教化を怠緩に附せんか、百樂綾貧して途に國運を動搖し、社會の福祉も亦衰失し、眞に重大なる結果を將來するに至らん、思ふて此に至らば誰か戰慄せざらんや、我が統一團の任や愈々重し、之に由て今回各自の道念を奮勵し、一層同志の結束を堅くし、本團の事業に刷新を加へ、高等教化と普通教化との二面に向つて奮鬪力戰せんことを誓ふ、願くは眞林同心の四衆遠かに來つてこの正定業に加盟し、之の淨業に參加せられんことを。

大正十三年十月一日

統一團

本部 東京市淺草區北清島町拾四番地
事務所 統一團 電話淺草六三三四番

（規則畧す）

文字の權威

本誌特刊單行本の反響

月刊の「統一」は日蓮主義文書宣傳の最高權威なりと信ずるが、更に時々發刊さるゝ本誌の單行本は如何の反響を有するか。各地の讀者から色んな手紙が來るが、左に九州の中野昇氏から寄せられたのを紹介する。

（前略）先般の有爲の奥山及自我偈講義も折にふれて拙本混在候處、多少の反響も有之、誠喜の至に御座候、その一例を左に掲錄御參考に相供へ候、

……

拜啓過日御惠贈被下候若人、うるの奥山今日こそて、自我偈講義、右三冊謹有拜受仕候、昨日始めて右の內注華經自我偈講義を拜讀仕候、少生はキリスト信者として是迄は一切の宗教はキリストに非ざれば宗教に非ず、即ちキリストは一切の宗教を包容して居るとのみ相考居候處、自我偈講義を拜讀し、始めて佛教の世界的宗教なる事を會得致候、要するに是迄少生が見聞したる佛教はすべて邪教にして、少生の心理に入らざるものなる事を始めて啓發せられたる事を知りたること、偏に貴下の賜に候、進ては佛教家が此趣旨に基き努力致候はゞ、實に國家のため、否世界の爲め、其本領を現はし得べき事と存候、感想の一端如斯御座候 早々

越中高岡の時局講演會

同友編輯長の一行は「統一」宣傳隊を組織し八月下旬福井縣高木を振出しに、北陸巡歩の旅に上つた。廿四日夜は三國港の小學校で本誌愛讀者增田太三郎氏の盡力で、講堂に溢るる聽衆に、大に時局の大事を說き、次第に行程を重ねて二十七日高岡市で、愛讀者畠山友次郎氏の盡力により大講演會を開く豫定であつたが、同友編輯長は母堂重患なりとの飛報に、急遽上京したので、一行中の見玉常宣師が代つて一大師子吼を試みた、同地高岡新報の記事を轉載する。

時局講演會

高岡市教育會並に高岡市聯合公道會合同主催の下に二十七日午後七時半より坂下町高等小學校に於て時局講演會を開いた、出席者約四百名、佐伯公道會副會長の開會の辭に次いで見玉常宣氏は「國難に當面して」「價値の見直し」の題下に時局難關內憂外患の時に當り國民の覺悟すべき點東洋文明の長所は益之れを發揮せしめ彼の長を採り短を補ふべき旨を切實に演述し十時十五分閉會した。

各地教信

京都教信

九月一日、岡崎會、關東大震火災一周年追悼法要午前九時法要後講演「回顧震災一周年」原田本山部長△二日夜講正會例會、豊田師講演△八日成就院に於て護正婦人會「復興は覺悟にあり」有田法道師△同日本正寺に於て二樂會△九日正行院に於て正行婦人會。原田部長講演△十三日宗觀會修行後三好師講演△十六日法光院に於て妙光婦人會「處世の要諦」豊田道泰師△二十日本山に於て彼岸初日法要後講演「大和民族の精神」有田師△廿二日妙祐久遠寺例會「日蓮上人の五大部に就て」土持師。「久遠」原田部長△廿三日本山に於て彼岸中日法要後講演「靈魂不滅」原田部長△同日夜本山講堂に於て講演會「正しき佛教の信解」本多日生猊下聽衆三百有餘△廿四日大慈院彼岸會、法王婦人會例會「信仰と感激」土持氏△廿五日寂光寺、彼

岸會。萩原師講演△廿六日本山に於て彼岸結日法要後講演「彼岸より見たる道德」豊田師△七日、十四日、廿一日、健兒會例會。

大阪堂圖寺教報 九月一日夜原田本山部長等師の許に關東震災殊死者一周年の法要を虔修し、直に講演に移り「開會の辭」京藤山主「其相知何」內藤日耶師「幸福なる生活」原田日勇師。近來稀れなる盛會多大の効果を奏せり△十二日「日蓮主義者の態度」山口智光師「入信之心得」上田智量師△二十二日「信仰の効果」京藤布教師「精進」和井田寛弔氏「所感」伴錦次氏△二十三日「菩提心を猛發せよ」京藤山主△二十四日大祇倶樂部にて立正結社主催「佛教の正しき信仰」本多大僧正祝下。二ヶ月間休會の爲め定刻前立錐の地なく、二時間に亘る大師子吼に滿場寂として水を打ちたるが如く、法悅歡喜の裡に散開せり。

金澤布教宣傳 九月一日午後一時より本長寺に於て、關東大震災横死者追吊大法會を執行し、終りて左の追吊講演あり。「何を以て廻向すべきか」本郷常次郎氏、「大自覺」窪田純榮師△八日於釜谷本成寺「法華經と女性」窪田師△十三日夜立正會講演「人生の無常と信仰生活」本郷氏、△十七日於坂井氏宅「日蓮聖人傳」本郷氏、△十九日於三由氏宅「知實知之」窪田師△廿日午後二時於日蓮宗彼岸會「諸行無常」本郷氏、聽衆二百餘名、△廿二日於本長寺「一心の妙用」窪田師、「法華經講義」本郷氏△廿三日午後二時於日蓮宗彼岸會「宗教の信仰」本郷氏、聽衆五百餘名△廿六日夜於本長寺天晴會講演「化城喩品概要」窪田師、「大藏經講義」本郷氏、△廿八日於本行寺「一昨日御書に就て」石橋會章師、「小善成佛」本郷常次郎氏、△尙ほ五日夜於日蓮宗寺院、日蓮主義大講演會開催せられ、陸軍少將野澤惟吾閣下には、「排日問題の教訓」の題下に大演長舌を振はれ、聽衆講堂非常の盛會なりき。

千葉縣各教區 大震災豊周年法要 千葉縣新第六布教區寺院一同は、九月一日二日の兩日を期し、縣下東金町本漸寺及片貝村本隆寺に追悼音樂大法要を虔修する事に決したりしが、東金町東漸寺に於て九月一日午后一時より中村僧正尊師の導に音樂大法要を修し、仝師の講話文に次て山武郡長其他官民の弔辭燒香及遺族の燒香あり二時半終了直に「法華經を背景とせる國是」武田文學士「震災と法華經」野口權大僧正の講演あり參拜者五百餘名仝五時半多大の感慨裡に終了したり。△仝月二日片貝村本隆寺に前記仝縣教區寺院一同參集、土屋眞容師等師として音樂法要執行、舊七教區內横死者四拾餘名に一々塔婆を供養し、遺族其他有縁の會する者多く、法要終了后「法華を背景とせる國是」武田文學士「大震災を追懷して」中村僧正の講演あり、仝五時終了后第七立正結社支部員の解散式あり、極て盛會なりし。

長生郡長柄村立正結社分會にては、十月五日午前十一時より飯尾寺に於て定期總會を開催し、法要最修後午后一時より大講演會「開會宣言」長岡分會長「祝辭」高橋校長「時感」秋山賢勇師「祝辭」秋葉二宮分會長「鎌倉時代と日蓮主義」木村令快師。

九月一日午后前の內常覺寺に於て關東大震災横死者追悼會執行「大震災を回顧して」中嶋元道師△十日夜常覺寺に於て十二日講「父母の慈恵」中嶋元道師△二十三日午后宮蓮成寺に於て彼岸中日講演「開會之辭」鶴澤疏温山主「至誠を盡して」中嶋元道師。

御斷り 記事遲滯の爲め各地より寄せられたる玉稿を掲載する能はず御了承を乞ふ。

廣告

日蓮宗法衣專門

諸種の準備が整ひましたから御注文品に就ては懇切叮重に而も廉價て勉强いたし多年の御愛顧に酬るたう存じますどうぞ御用命を願ひます

東京市赤坂區一ッ木町八十六番地

柏屋 中山喜太郎

（市電）豐川稻荷前

社寺建築用 臺灣檜材の安價提供

當所は社寺建築改善の目的を以臺灣總督府、內務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申此間工事の大小に拘らず左記御便宜個所へ御相談被下度候

追て設計規程並目安表等御入用の向は御申越次第呈上仕候

東京市麴町區有樂町三丁目三番地
社寺工務所（電話青山四六六三番）

大阪市西區市岡町七十九番地
社寺工務所大阪支店（電話西三二二四番）

福岡市外堅箱町馬出松原
社寺工務所福岡支店（電話二二三〇番）

京都市上京區廣道二條上ル
社寺工務所京都出張所（電話上六三六番呼出）

神奈川縣鎌倉由比ケ濱町二百四十番地
社寺工務所鎌倉出張所（電話百十七番）

神奈川縣鶴見町芦穂崎
社寺工務所鶴見支所

目次

時局に當面して諸氏の發憤を望む……佐藤皐藏
國家の興隆と佛法の興隆……本多日生
罷睡錄……山根日東
法華經要文講義……本多日生
日蓮主義より見たる無量義經……井村日成
記事報導……

第廿八年拾貳月號

本多日生猊下施本用著書一覽

○法華經自我偈講義　拾部　特價　金貳拾錢
○法華經要文　拾部　特價　上製金壹圓（送料共）　金參拾錢　金五拾錢
○教育勅語と思想問題　拾部　特價　金貳拾錢　金壹圓（送料共）
○佛教の大要　參拾部　特價　金五錢
○うゐの奥山今日こえて　拾部　特價　金壹圓（送料共）　金貳拾錢
佐藤海軍中將著
○此の際に於る吾人の覺悟　拾部　特價　金壹圓廿錢（送料共）　金拾貳錢

右講讀希望者は左記へ申込んで下さい　拾貳部　特價　金壹圓（送料共）　以上各送料一部金貳錢

名古屋市東區田代町城山

統一編輯局

國電話東五四八七番
振替名古屋一〇八一九番

統一定價		
一ヶ年	半ヶ年	一部
金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳拾錢
送料共	送料共	送料五厘
之	金	前

統一廣告料		
四分一頁	半頁	一頁
金五圓	金九圓	金拾五圓
事之	金	前

社告

年賀廣告を取扱ひます

大正四年一月一日發行の統一誌上に我徒同志の賀詞を連載して已人賀狀の贈答を省略してはいかゞですか

特に本誌を御利用相成る事を御勸めいたします

申込期日　十二月十五日限り

申込所　名古屋市東區田城町　統一編輯局
東京府荏原郡品川町眞了院　大森日榮

料金　五號活字三行分金五十錢他はこれに準ず（料金は前納の外取扱はず）

大正十三年十月十七日印刷納本
大正十三年十一月一日發行（第三百五十六號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄
印刷所　三益社
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番
名古屋市東區田代町字城山七十七番地
編輯所　統一編輯局
電話東五四八七番
振替名古屋一〇八一九番

不許複製